

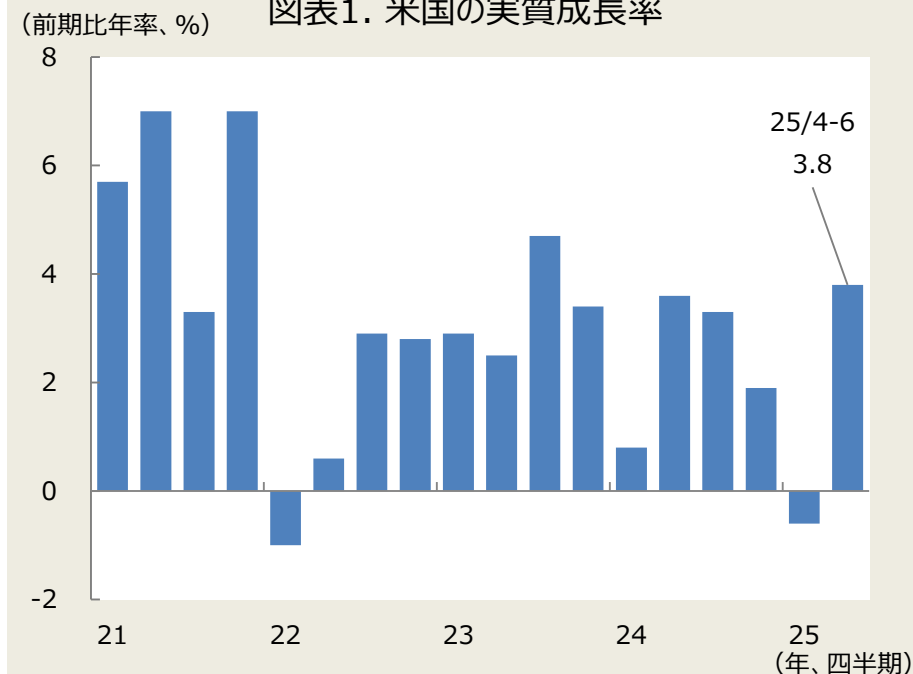
海外経済の現状と見通し : 2025年 11月

米 国

4-6月期の実質国内総生産（GDP、図表1）成長率は前期比年率+3.8%と、2四半期ぶりのプラス成長となりました。関税を控えた駆け込み輸入の反動減が成長率を押し上げたことに加え、設備投資などが底堅く推移しました。7月以降も、株高の恩恵を受けやすい高所得者層に支えられる形で、個人消費は底堅さを維持している一方、雇用環境は減速傾向にあります。政府機関の閉鎖の影響で9月以降の雇用統計は公表が滞っているものの、米国の民間給与計算代行業者ADPが公表する10月の民間雇用者数は前月差+4.2万人と低い伸びとなりました。

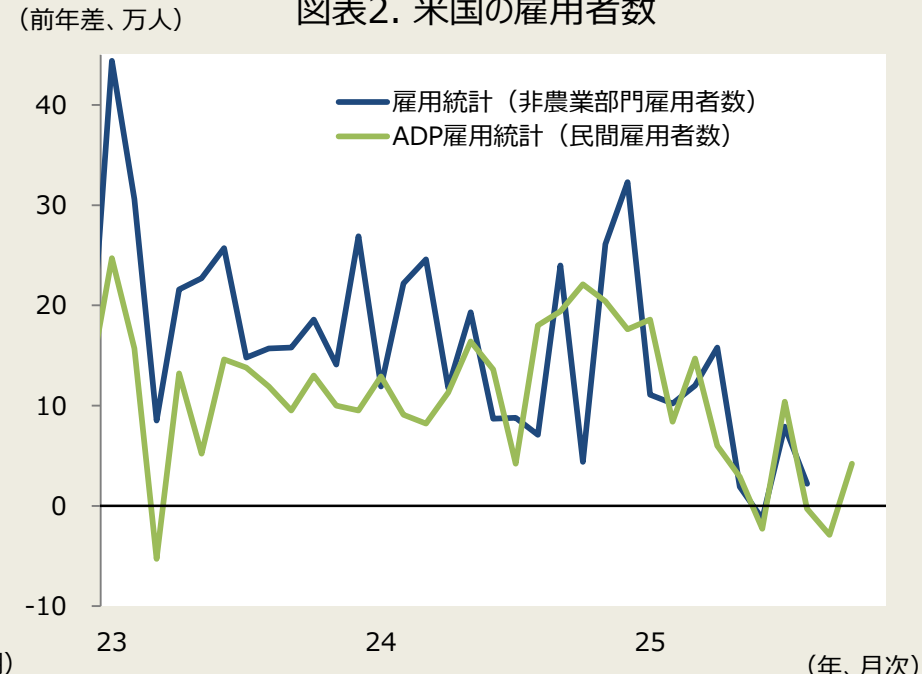
今後は、トランプ政権下での関税政策による悪影響が顕在化するにつれて、景気の停滞感が強まると見込まれます。関税引き上げによるインフレ再燃により、家計の購買力が低下し、個人消費を下押しする可能性があります。米連邦準備理事会（FRB）は雇用のさらなる悪化を防ぐために利下げを進めるとみられますが、インフレ再燃懸念もくすぶるなかで、利下げペースについては不透明感が強い状況です。

図表1. 米国の実質成長率



(出所) 米経済分析局よりデータ取得し、しんきん投信作成

図表2. 米国の雇用者数



(出所) 米労働省よりデータ取得し、しんきん投信作成

米国の景気・物価・金融政策の見通し

	2024年 (実績)	2025年 (予測)	2026年 (予測)	(実績)	(予測)					(前期比年率、前年比、%)	
				2025年 4-6月期	7-9月期	10-12月期	2026年 1-3月期	4-6月期	7-9月期		
実質成長率	2.8	1.9	1.8	3.8	2.8	1.1	1.5	1.9	2.0		
PCE価格指数	2.9	2.9	2.8	2.7	2.9	3.1	3.0	3.0	2.8		
政策金利	4.50	3.75	3.50	4.50	4.25	3.75	3.75	3.75	3.75		

(注) シャドー部分は実績値、予測はしんきん投信。実質成長率(四半期)は前期比年率。PCE価格指数はコア(食品とエネルギーを除く)。政策金利は上限金利、期末値。

(出所) 米商務省、米労働省、FRBよりデータ取得し、しんきん投信作成

金融市場見通し

【予想レンジ期間】(2025年11月～2026年9月)

米株式相場

【予想レンジ】NYダウ：39,000～50,000ドル

◆高値警戒感から、当面は上値の重い展開となりそうです。

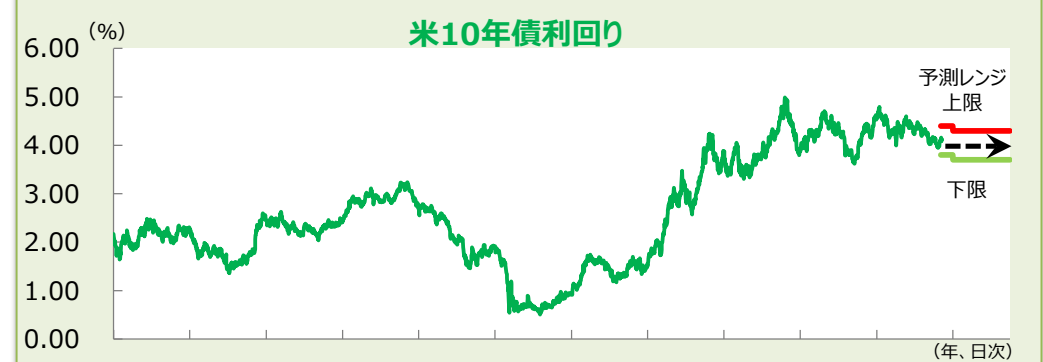


(注) 点線矢印は予測イメージ
(出所) 実績はBloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成。予想はしんきん投信

米長期金利

【予想レンジ】米10年債利回り：3.70～4.40%

◆FRBの利下げはすでに織り込まれているため、金利低下余地は限られそうです。



(注) 点線矢印は予測イメージ
(出所) 実績はBloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成。予想はしんきん投信

為 替

【予想レンジ】ドル円レート：144.0～156.0円

◆日米の金融政策の変更が織り込まれることで、緩やかな円高が進行しそうです。



(注) 点線矢印は予測イメージ
(出所) 実績はBloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成。予想はしんきん投信

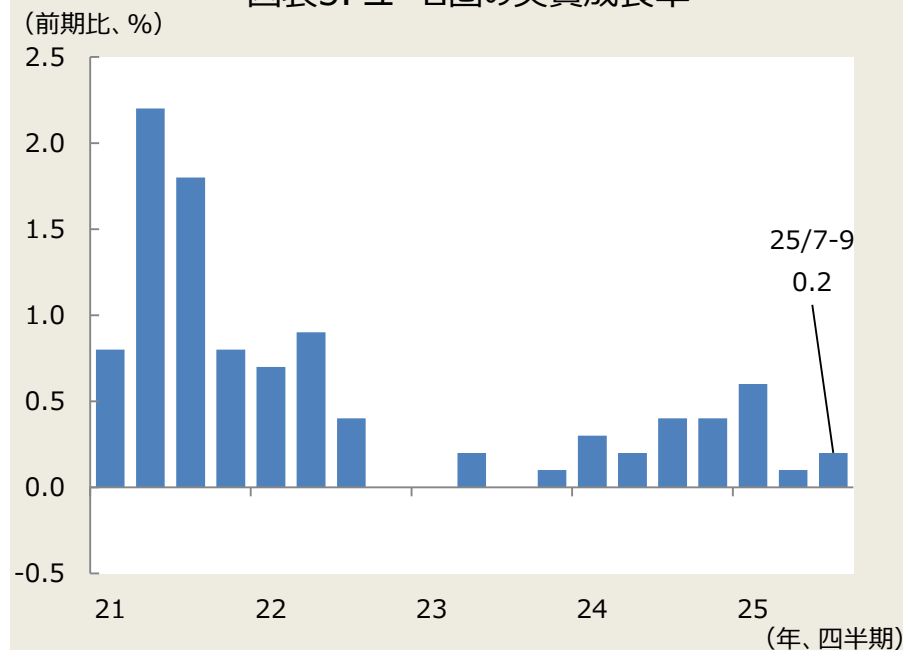
海外経済の現状と見通し : 2025年 11月

ユーロ圏

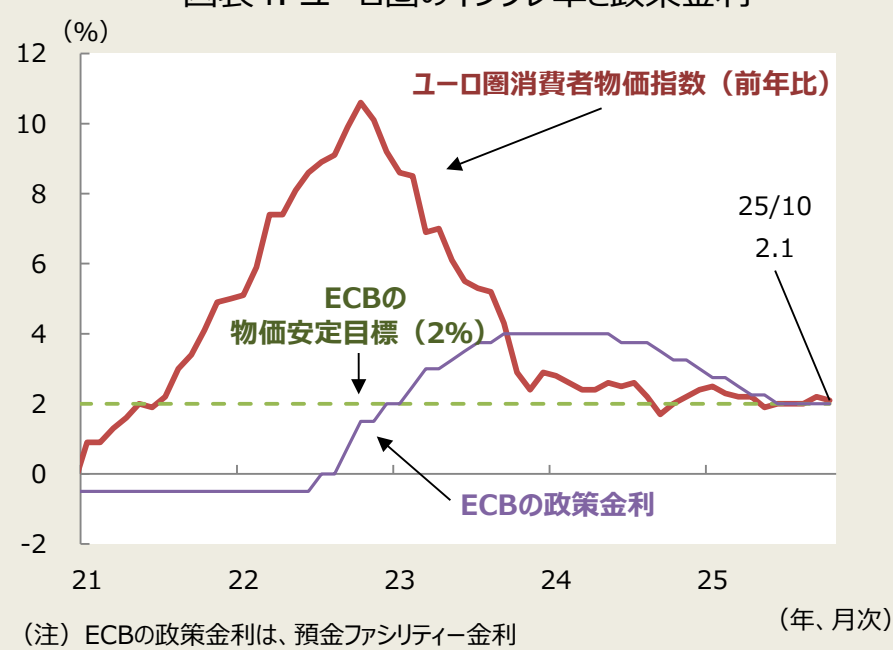
7-9月期の実質国内総生産（GDP、図表3）は前期比+0.2%と、8四半期連続でプラス成長となり、前月から伸びが加速しました。国別にみると、ドイツとイタリアはテクニカルリセッション（2四半期連続のマイナス成長）を回避したほか、フランスは政局混乱のなかでも2023年以来の高い伸びとなりました。先行きは、米国の関税政策により外需が落ち込むものの、欧州中央銀行（ECB）による既往の利下げや各国の財政政策が景気を押し上げることで、2025年は1%台前半の成長が予想されます。

10月の消費者物価指数（図表4）の伸びは前年比2.1%と、ECBの物価安定目標である2%前後での推移が続いています。こうしたなかで、ECBは10月会合で3会合連続での利下げの見送りを決定しました。今後も、物価安定が見込まれるなかで、政策金利を据え置くことが予想されますが、米国の関税政策の影響次第では、追加利下げに踏み切る可能性もあります。

図表3. ユーロ圏の実質成長率



図表4. ユーロ圏のインフレ率と政策金利



(出所) Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

(注) ECBの政策金利は、預金ファシリティー金利
(出所) Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

ユーロ圏の景気・物価・金融政策の見通し

	(実績)			(予測)					(前年比、%)
	2024年 (実績)	2025年 (予測)	2026年 (予測)	2025年 4-6月期	7-9月期	10-12月期	2026年 1-3月期	4-6月期	7-9月期
実質成長率	0.9	1.3	1.1	1.5	1.3	1.0	0.8	1.0	1.2
消費者物価	2.4	2.1	1.8	2.0	2.1	2.0	1.7	1.9	1.8
政策金利	3.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00

(注) シャドー部分は実績値、予測はしんきん投信。消費者物価は総合。政策金利（預金ファシリティー金利）は期末値

(出所) 欧州委員会、ECBよりデータ取得し、しんきん投信作成

金融市場見通し

【予想レンジ期間】(2025年11月～2026年9月)

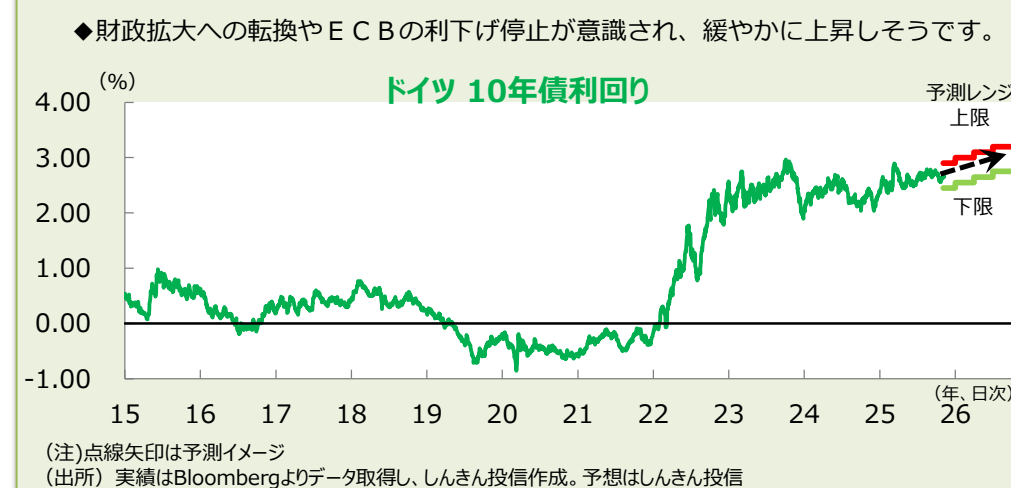
独株式相場

【予想レンジ】DAX：21,500～27,000ポイント



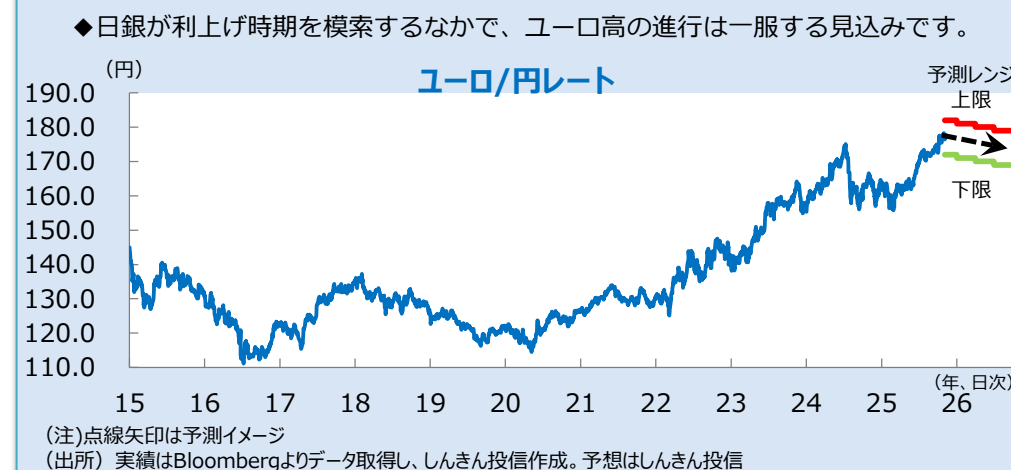
独長期金利

【予想レンジ】独10年債利回り：2.45～3.20%



為替

【予想レンジ】ユーロ円レート：169.0～182.0円

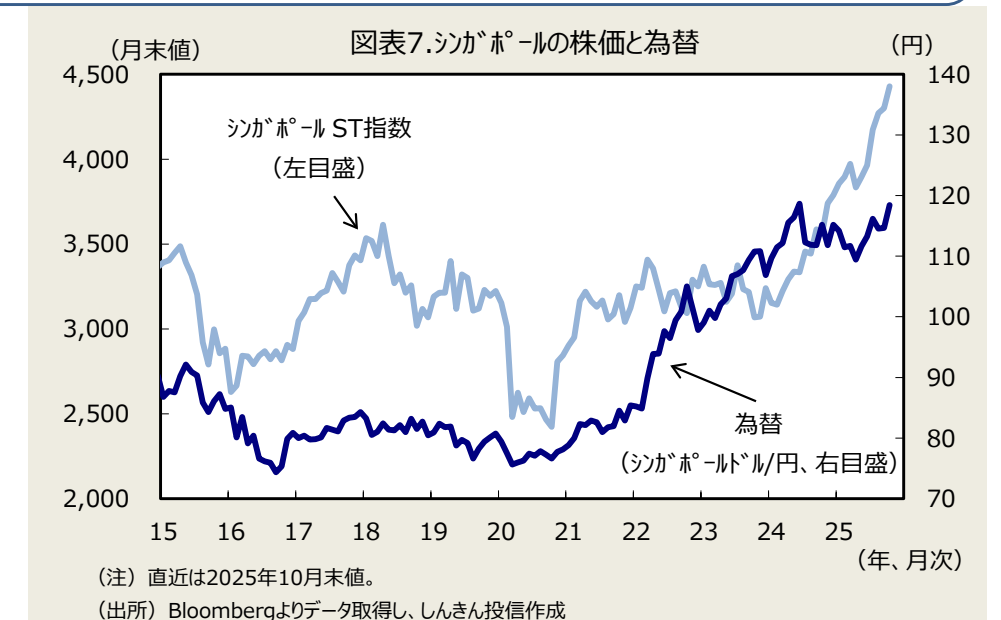
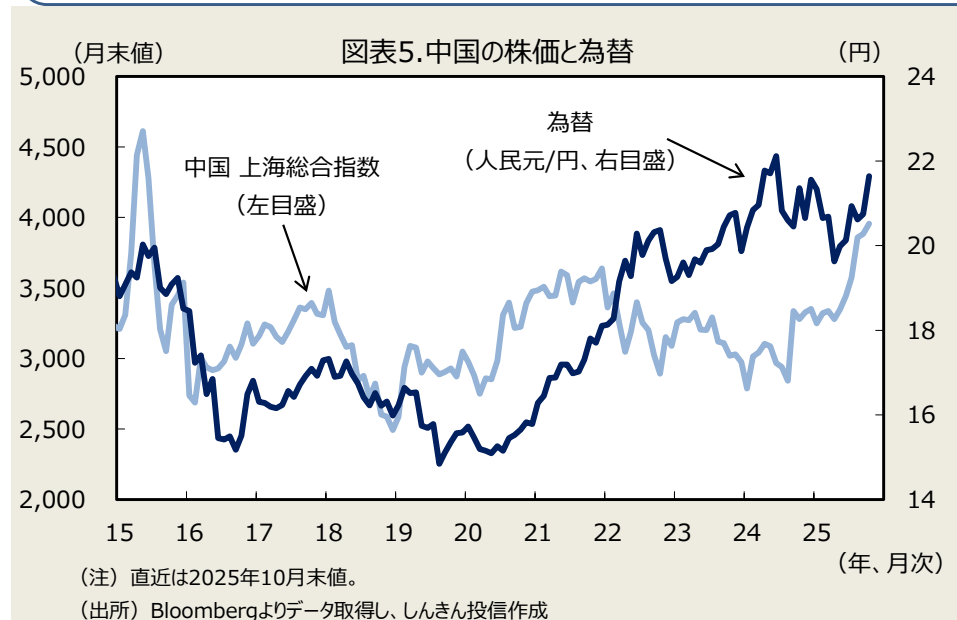




海外経済の現状と見通し : 2025年 11月

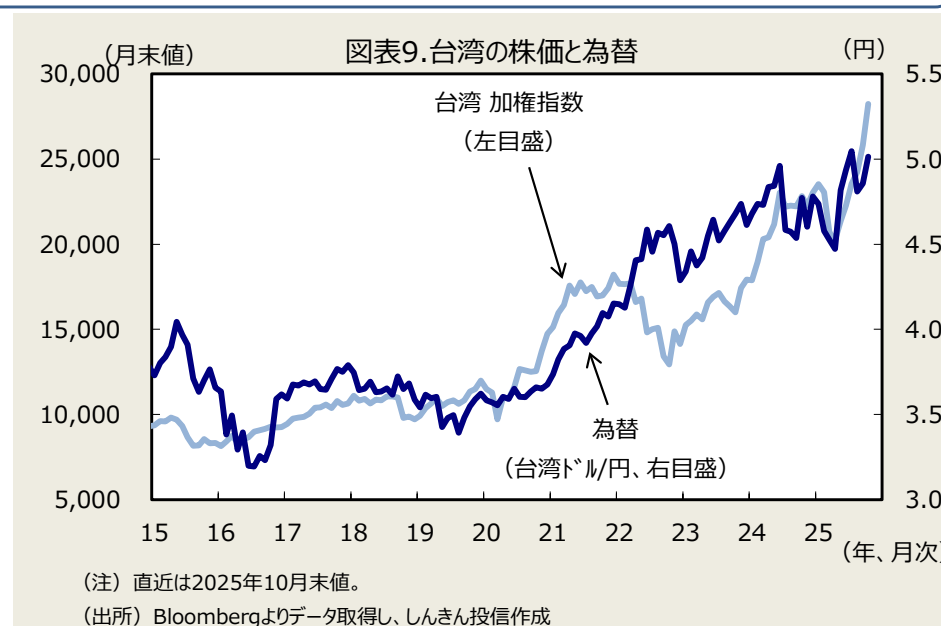
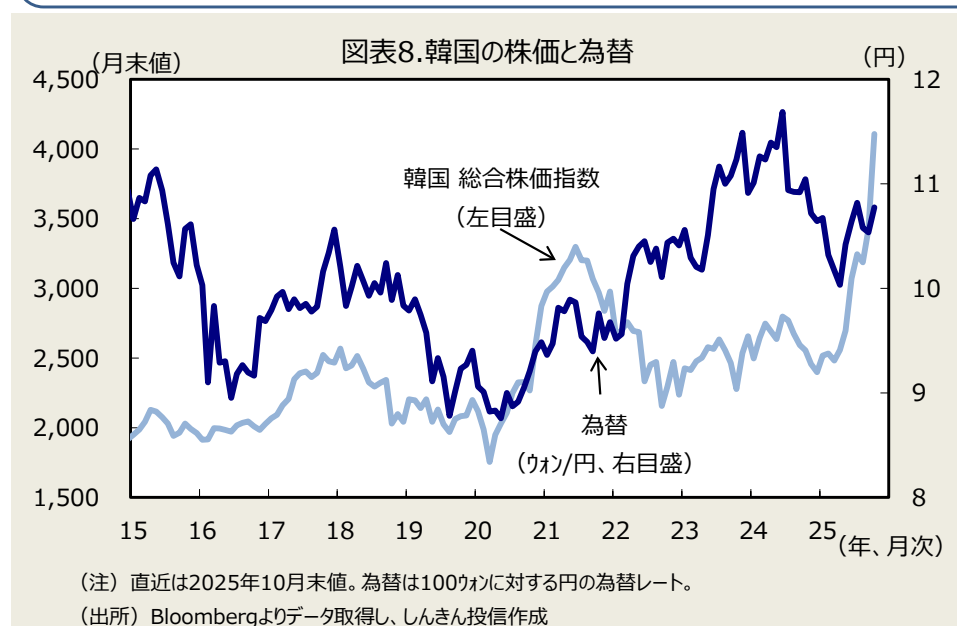
中国、香港、シンガポール

中国は、7-9月期の成長率は減速したものの、米国以外の地域向けの輸出が底堅いほか、米国との通商交渉の進展や中国当局の経済対策が景気を下支えする見込みです。**香港**は、中国本土の景気減速や不動産市況の低迷が成長の重しとなっていますが、利下げが内需を押し上げると予想されます。**シンガポール**は、外需依存度の高さから、米国の関税政策に起因する世界経済の減速が今後の景気の重しになる見込みです。



韓国、台湾

韓国は、消費刺激策による景気下支え効果が期待される一方、米国の関税政策が外需を下押しする見通しです。**台湾**は、世界的な半導体需要の増加により外需が堅調であるほか、現金給付などの経済対策も景気を押し上げると予想されます。



●アジア金融市場の見通し

(株式) アジア株は当面上値の重い展開が予想されます。米国の関税政策による各国景気への悪影響が懸念されるほか、ハイテク株を中心に高値警戒感が強まるなかで、上値を追う動きは限られるとみられます。ただし、各国の財政政策や中銀の利下げなどにより景気は底堅い推移が予想されるため、株価の大幅な調整は避けられると予想されます。

(為替) アジア通貨は、対ドルでは不安定な動きが予想されます。米国の政府機関が再開すると一時的にドルを買い戻す動きが広がる可能性があります。米連邦準備理事会(FRB)の今後の金融政策の行方が相場を左右する見込みです。10月会合後のパウエルFRB議長の追加利下げに慎重な発言を受け、12月会合での利下げ期待は後退しましたが、次期議長に利下げに前向きな人が指名されると、利下げ期待の高まりにより、ドル安・アジア通貨高が進行する可能性があります。一方、対円では、長期的には、日銀の利上げ観測が円高圧力になるとみられますが、高市新政権での財政悪化懸念や、日銀の利上げ後ずれ観測から、一時的に円売りが優勢になる可能性があります。

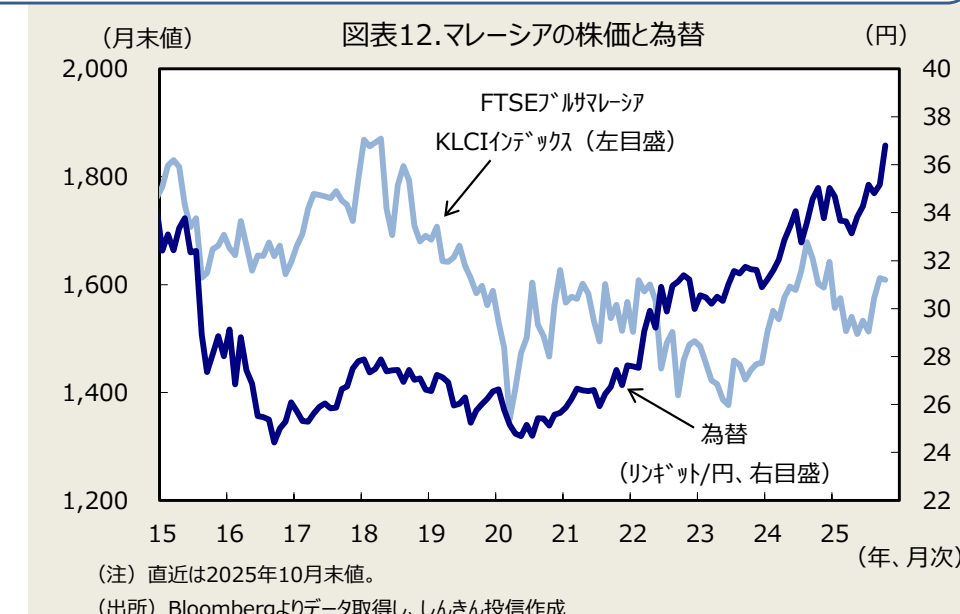
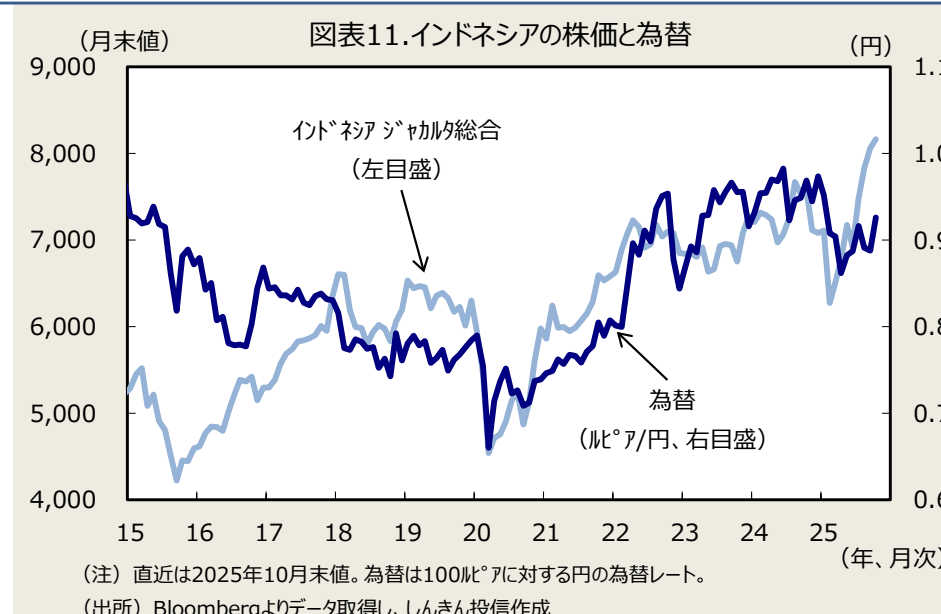
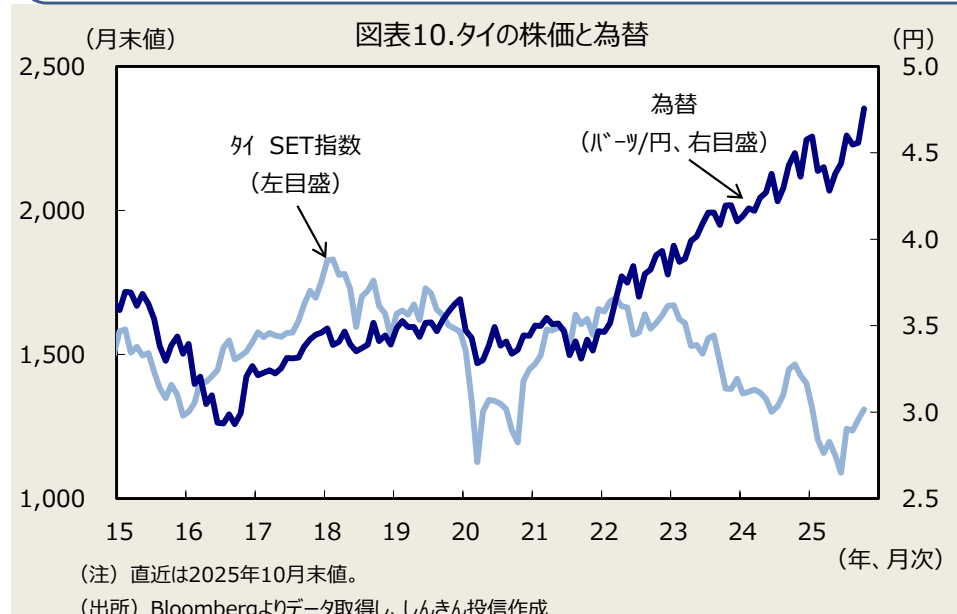
(金利) 長期金利は低下基調が続く見込みです。各国のインフレは総じて落ち着いているため、米国の関税政策による景気悪化懸念から、多くの地域の中銀が利下げを進めるとみられます。



海外経済の現状と見通し : 2025年 11月

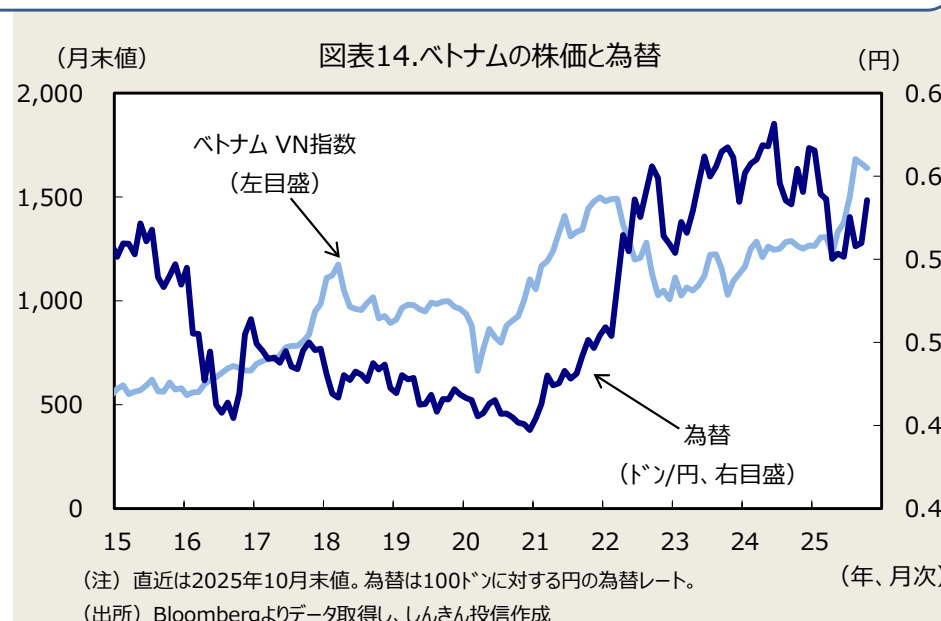
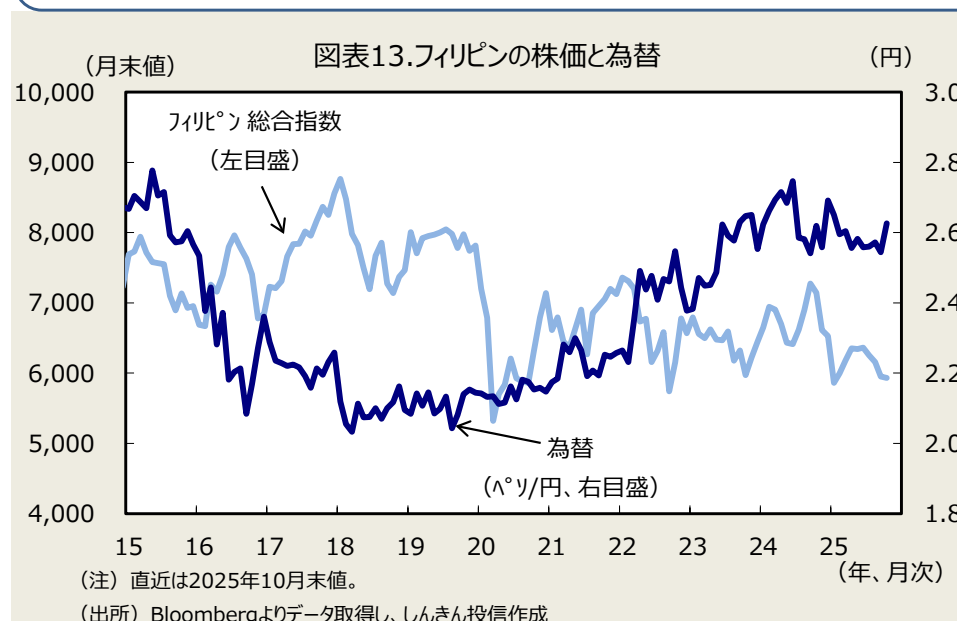
タイ、インドネシア、マレーシア

タイは、観光業の失速が続くほか、米国の関税政策と通貨（バーツ）高が外需を下押す可能性があります。インドネシアは、足元の雇用環境は悪化傾向にあるものの、追加の経済対策が景気を下支える見通しです。マレーシアは、7-9月期は予想を上回る高成長となったものの、今後は米国の関税政策の影響で景気は減速する見込みです。



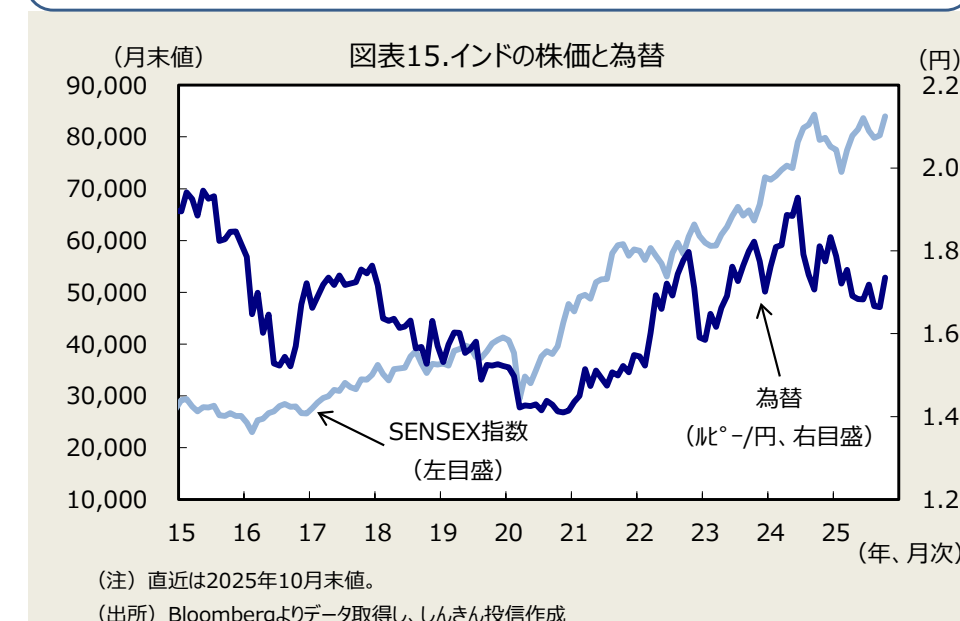
フィリピン、ベトナム

フィリピンは、民間部門は底堅い一方、汚職問題を背景とする政府の予算執行の後ろ倒しが景気の重しになっています。ベトナムは、7-9月期は高成長となったほか、所得税の減税などを背景とする内需の回復が経済を下支える見通しです。



インド

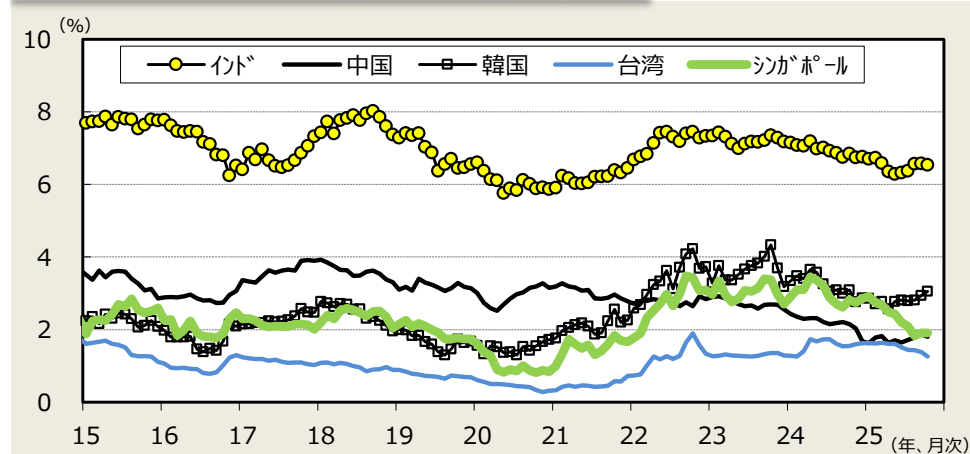
インドは、既往の利下げや減税が景気を下支えるほか、米国との通商交渉の進展が期待されます。



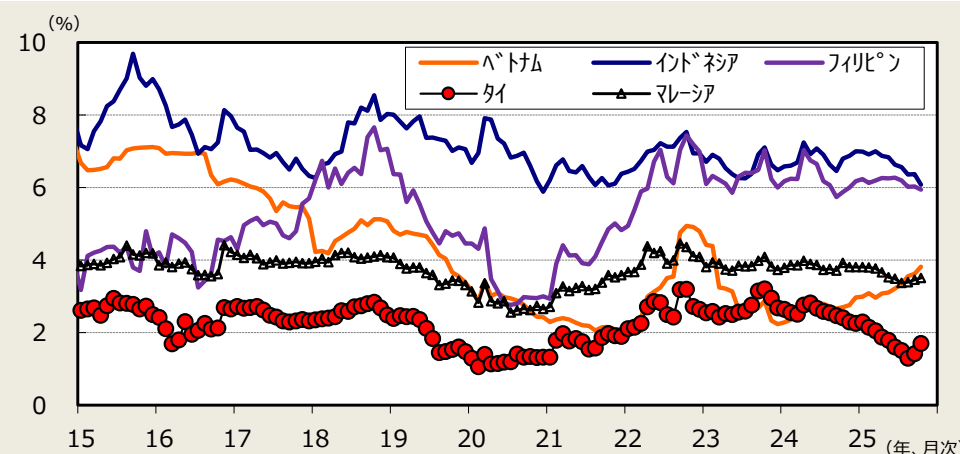


海外経済の現状と見通し : 2025年 11月

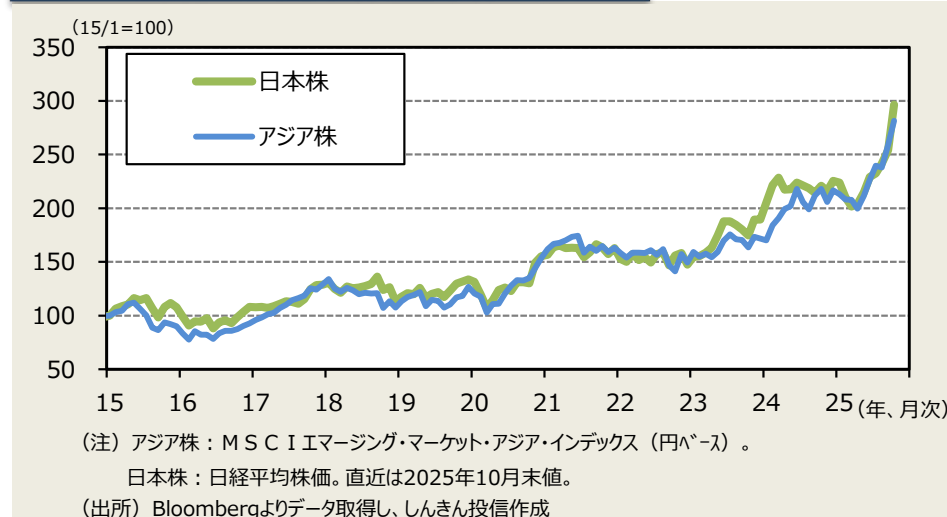
図表16.アジア各国・地域の長期金利



(注) 長期金利は10年国債利回りの月末値。直近は2025年10月末値。
(出所) Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成



図表20.アジア株と日本株

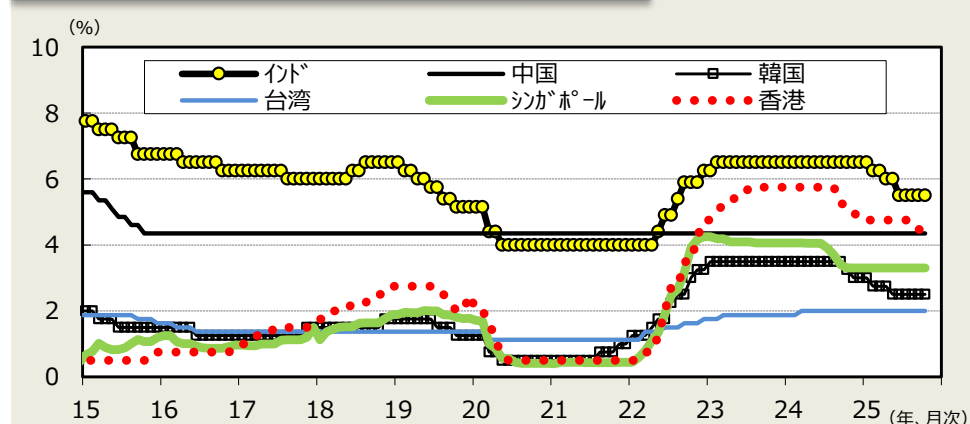


図表21.アジア主要国・地域の経済見通し

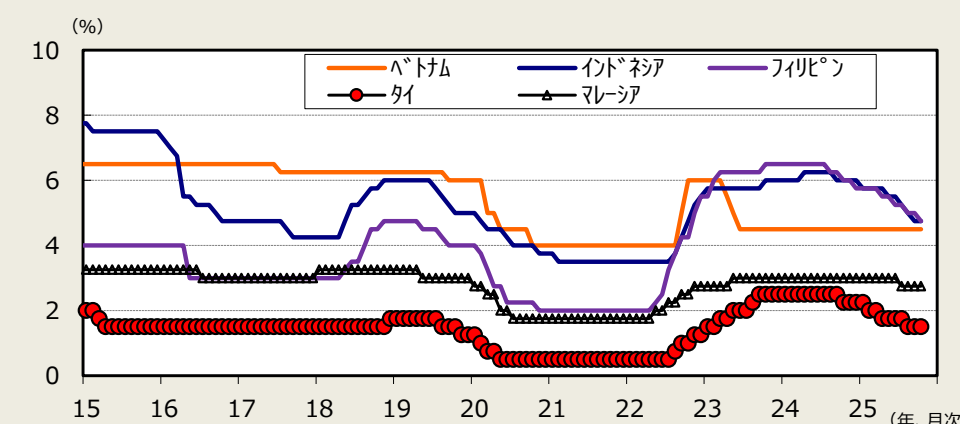
	①実質GDP成長率			②インフレ率		
	2024	2025 (予)	2026 (予)	2024	2025 (予)	2026 (予)
中国	5.0	4.8	4.2	0.2	0.0	0.7
NIEs						
韓国	2.0	0.9	1.8	2.3	2.0	1.8
台湾	4.8	3.7	2.1	2.2	1.7	1.6
香港	2.5	2.4	2.1	1.7	1.7	2.1
シンガポール	4.4	2.2	1.8	2.4	0.9	1.3
ASEAN						
タイ	2.5	2.0	1.6	0.4	0.2	0.7
インドネシア	5.0	4.9	4.9	2.3	1.8	2.9
マレーシア	5.1	4.5	4.0	1.8	1.6	2.2
フィリピン	5.7	5.4	5.7	3.2	1.6	2.6
ベトナム	7.1	6.5	5.6	3.6	3.4	3.2
インド	6.5	6.6	6.2	4.6	2.8	4.0

(注) インドは年度データ(4月～翌年3月)。実績はBloomberg、斜線はIMFによる予測値。
(出所) IMF、Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

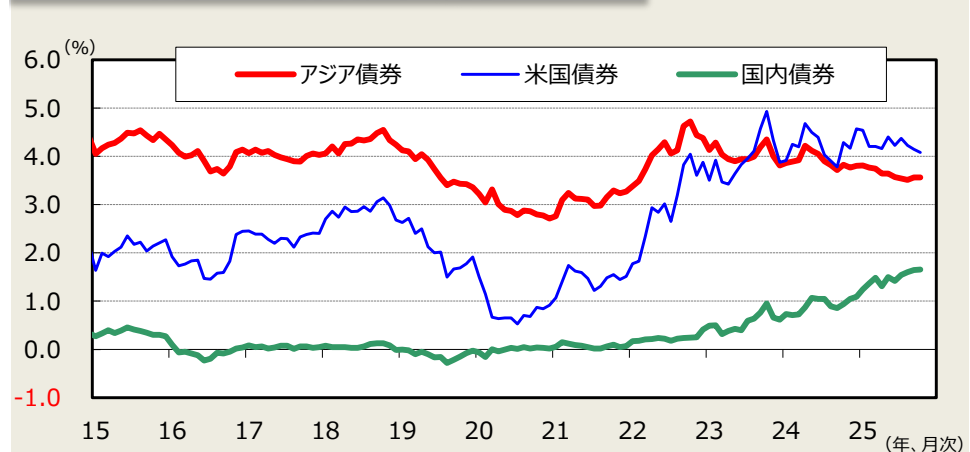
図表17.アジア各国・地域の政策金利



(注) シンガポールは、参考金利としてインターバンク3か月物金利、ベトナムはリファイナンス金利、インドネシアは2016年4月より7日物リバースレポ金利を表示している。直近は2025年10月末値。
(出所) 各国通貨当局、Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

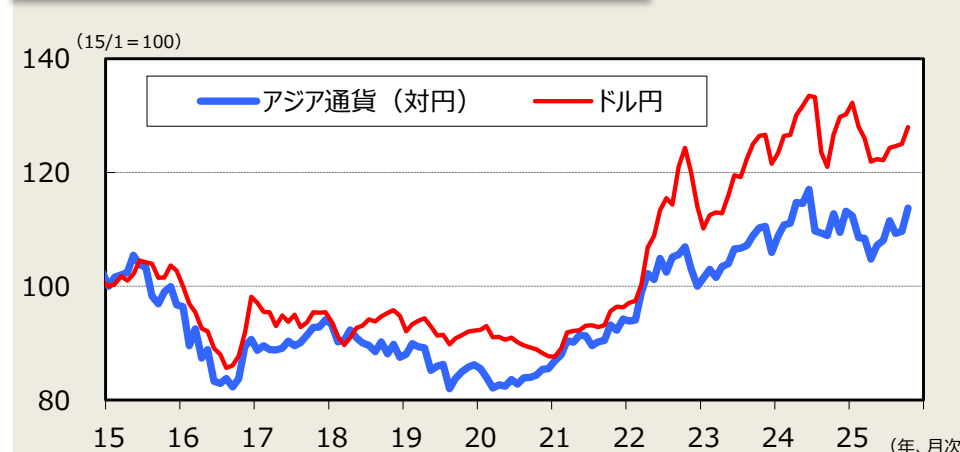


図表18.債券利回りの比較



(注) アジア債券：アジア10か国(図表12参照)の10年国債利回りの単純平均。
先進国債券：米国10年国債。国内債券：新発10年国債。直近は2025年10月末値。
(出所) Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

図表19.アジア通貨とドル円



(注) アジア通貨：Bloomberg Asia Dollar Index。直近は2025年10月末値。
(出所) Bloombergよりデータ取得し、しんきん投信作成

(2025.11.10 エコノミスト 北辻 宗幹)



＜本資料に関してご留意していただきたい事項＞

- ※本資料は、ご投資家の皆様に投資判断の参考となる情報の提供を目的として、しんきんアセットマネジメント投信株式会社が作成した資料であり、金融商品取引法に基づく開示資料ではありません。
- ※本資料は、信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。また、いかなるデータも過去のものであり、将来の投資成果を保証・示唆するものではありません。
- ※本資料の内容は、当社の見解を示しているに過ぎず、将来の投資成果を保証・示唆するものではありません。記載内容は作成時点のものであるため、予告なく変更する場合があります。
- ※投資信託は、預金や保険契約とは異なり、預金保険機構・保険契約者保護機構の補償の対象ではありません。また、登録金融機関でご購入いただいた投資信託は、投資者保護基金の対象ではありません。
- ※投資信託は、値動きのある有価証券等(外貨建資産には為替リスクもあります)に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、預金と異なり投資元本が保証されているものではありません。運用による損益は全て投資者の皆様に帰属します。
- ※特定ファンドの取得のお申込みに当たっては、販売会社より当該ファンドの投資信託説明書(交付目論見書)をあらかじめ又は同時にお渡しいたしますので、必ず内容をご確認の上、ご自身でご判断ください。

※本資料で使用している各指数に関する著作権等の知的財産権、その他一切の権利はそれぞれの指数の開発元もしくは公表元に帰属します。

【お申込みに際しての留意事項】

■投資信託に係るリスクについて

- 投資信託は、株式や債券等の値動きのある有価証券等(外貨建資産には為替リスクもあります)に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、預金と異なり投資元本が保証されているものではありません。運用による損益は全て投資者の皆様に帰属します。
- また、投資信託は、個別の投資信託ごとに投資対象資産の種類や投資制限、取引市場、投資対象国等が異なることから、リスクの内容や性質が異なりますので、ご投資に当たっては投資信託説明書(交付目論見書)や契約締結前交付書面をよくご覧ください。

■投資信託に係る費用について

(お客様に直接ご負担いただく費用)

- ◆ご購入時の費用…購入時手数料 上限3.3%(税抜3.0%)
- ◆ご換金時の費用…信託財産留保額 上限0.3%

(保有期間中に間接的にご負担いただく費用)

- ◆運用管理費用(信託報酬)…純資産総額に対して、上限年率1.628%(税抜年率1.48%)
- ◆その他の費用…監査費用、信託財産に関する租税、信託事務の処理に要する諸費用、有価証券売買時の売買手数料等および外貨建資産の保管等に要する費用は、ファンドより実費として間接的にご負担いただきます。また、投資信託証券を組み入れる場合には、お客様が間接的に支払う費用として、当該ファンドの資産から支払われる運用管理費用、投資資産の取引費用等が発生します。これらの費用につきましては、運用状況等により変動するものであり、事前に料率、上限額等を示すことができません。投資信託に係る上記費用(手数料等)の合計額については、ご投資家の皆様がファンドを保有される期間等に応じて異なりますので、表示することができません。

《ご注意》

上記に記載しているリスクや費用につきましては、一般的な投資信託を想定しております。費用の料率につきましては、しんきんアセットマネジメント投信が運用する全ての投資信託のうち、ご負担いただくそれぞれの費用における最高の料率を記載しております。投資信託に係るリスクや費用は、それぞれの投資信託により異なりますので、ご投資される際には、事前に投資信託説明書(交付目論見書)や契約締結前交付書面をよくお読みください。